訳注漢碑引経攷（五）

―巻の一『易』その四―

東　賢司
（大分大学教育福祉科学部書道教室）

【要　旨】　前編に続いて、皮錫瑞『漢碑引経攷』の巻之一『易』の訳注の続きである。本論は『易経』の漸・豊・旅・兌・中孚・小過・既済・未済・繫辞の中で関連する項目を十七取り上げ、訓読・口語訳・注を付す。ここではそれぞれの項目に取り上げられている『易経』の本文とその解説をあげておく。番号は、『易』の項目の通し番号である。

81鴻漸于陸…鴻雁が高く舞って、天上の雲路を飛んでゆく。
82与時消息…四季に従い、消衰したり増長したりして進退する。
83得其資斧…高禄を受け、権勢を獲得する。
84斉斧…黄鉞。
85説以犯難…君主が喜んで困難に当たる。
86講習…学問を研究する。
87我有好爵…私に立派な杯（爵）があるので、あなたと喜びを共にしたい。
88喪過乎哀…親の喪に服する時には、悲しみにし過ぎるくらいにする。
89用過乎俭…用度を節約し、俭約にし過ぎるくらいにする。
90高宗伐鬼方三年克之…高宗（武丁）は、鬼方というを異民族を征伐したが、三年経過してやっと勝つことができた。
91東鄰殺牛…東土の殷が牛を殺して供え物とし、盛大な先祖のお祭りをする。
92不如西鄰之禴祭、実受其福…西土の周が先祖を祭るにあたって、お供え物の貧弱な質素な祭りをして、ただ誠意がこもっているので、神が至誠を喜んでこれに福を下すのに及ばない。
93辯物居方…慎重に物の性質を区別し、それぞれの物をその性質のかなった所に置く。
94乾坤定…乾坤の二卦が定まる。
95易簡…容易で少しの困難のない易と、簡単で少しの煩雑もない簡の徳を身につける。
96繫辞焉而明其吉凶。繫辞焉以断其吉凶…辞があって吉凶が明らかになる。占辞を繫けて、変化する人間活動の吉凶を断定せられた。
97居則玩其辞動則察其変…平居無事の時には、その卦に繫けられている爻辞を熟読玩味し、動いて事を行うに当たっては、陰陽の変化を観察する。

【キーワード】　漸・豊・旅・兌・中孚・小過・既済・未済・繫辞

81　［本　文］

当漸鴻羽。（予州従事尹宙碑）[1]　鴻漸衡門。（太尉楊震碑）　鴻儀催零。（金郷長侯成碑）　鴻漸…欠字…奮。（廬江太守范式碑）[2]　羽儀上京。（呉九真太守谷朗碑）[3]

漸、上九鴻漸于陸。其羽可用為儀。吉。

［訓　読］

当に鴻羽を漸（すす）むべし。（予州従事尹宙碑）　鴻衡門に漸（すす）む。（太尉楊震碑）　鴻の儀催（うなが）し零（こぼ）す。（金郷長侯成碑）　鴻漸（すす）み…欠字…奮。（廬江太守范式碑）　羽の儀上京す。（呉九真太守谷朗碑）

漸に「上九、鴻陸（ちまた）に漸（すす）む。其の羽用て儀と為すべし。吉」と。

［口語訳］

整然と進んでいくべきである。（予州従事尹宙碑）　鴻雁が粗末な家に進んでゆく。（太尉楊震碑）　鴻雁の様子は手本となり、うながし溢れる。（金郷長侯成碑）　鴻が進み…欠字…奮。（廬江太守范式碑）鴻雁は京に上る。（呉九真太守谷朗碑）

漸に「上九に、鴻雁が高く飛んで、はるか天上の雲路を飛んでゆく。その群れを成して秩序整然と飛んでゆく様は、人の手本とすることができる」とある。

［注］

1予州従事尹宙碑…後漢の熹平六年（一七七）の刻。隷書十四行、一行二十字。明の嘉靖中、河南省鄢陵から出土し、孔子廟に保存されている。

2廬江太守范式碑…魏の青龍三年（二三五）の刻。上截及び篆額部の二断石を存する。上截部は隷書十二行、一行十五字～十六字、碑陰に題名三十七人がある。この断碑は清の乾隆四十一年（一七七六）に碑首が、同五十二年に碑身が厳誠の捜訪によって済寧州学櫺星門付近から出土した。

3呉九真～谷朗碑…呉の鳳凰元年（二七二）の刻。隷書十八行、一行二十四字、題額に「呉故九真太守府君之碑」とあり、隷書陰文十一字がある。書体は楷書と隷書の中間体である。異体文字が多い。湖南省耒陽に現存する。

82　［本　文］

与時消息。（辺韶老子銘）

見豊卦。

［訓　読］

時と与（とも）に消息す。（辺韶老子銘）

豊卦に見ゆ。

［口語訳］

四季に従って消衰したり増長したりして進退する。（辺韶老子銘）

豊卦に見ることができる。

83　［本　文］

亦用齊斧。（太尉橋公廟碑）

旅、九四得其資斧。此引作齊斧者。釈文子夏伝及衆家並作齊斧。[1]張軌云、齊斧蓋黄鉞斧也。張晏云、[3]整齊也。応劭云、[4]齊利也。虞喜志林云、[5]齊当作齋。齋戒入廟而受斧。下卦同。沈欽韓曰、案釈言劑翦齊也。郭云、南方人呼翦刀為劑刀。説文翦齊断也。齊斧之字義取斬断。[7]虞喜言、齋戒非也。錢坫曰、[8]易資斧子夏作齊斧。攷工記、通四方之珍異以資之注、故書資作齊。是資与齊通。宋翔鳳曰、[9]案陸氏以子夏為卜氏。[10]為説易之最初。案舉子夏以冠衆家。則自小王以下、無不作齊斧矣。漢書敘伝、終用齊斧注張晏云、斧鉞斧也。以整齊天下也。[11]又案蔡邕集太尉橋公碑、爰将度遼、亦用齊斧。[12]文選陳孔璋檄呉将校部曲云、要領不足、以膏齊斧。晉書楽志、乃整元戎、以膏齊斧。[13]

則古人多用齊斧。

［訓　読］

亦た齊斧を用う。（太尉橋公廟碑）

旅に「九四に其の資斧を得」と。此れ引きて「齊斧」なる者に作る。『釈文』に「子夏伝に、衆家及び並びに齊斧に作る、と。張軌云く、「齊斧」は蓋し黄鉞の斧ならん、と。張晏云く、整は齊なり、と。応劭云く、齊は利なり、と。虞喜『志林』に云く、齊は当に齋に作るべし、と。齋戒廟に入り斧を受く。下の卦は同じ」と。沈欽韓曰く「案ずるに、『釈言』に劑・翦は齊なり」と。郭云く「南方の人翦刀を呼びて劑刀と為す。『説文』に翦は齊断なり、と。齊斧の字義は斬断を取る。虞喜言く、齋は戒なりとは非なり、と。錢坫曰く、易の資斧は子夏に「齊斧」に作る。攷工記に「四方の珍異に通じ以て之を資る」の注に「故書に「資」は「齊」に作る」と。是れ「資」と「齊」とは通ず。宋翔鳳曰く「案ずるに陸氏子夏を以て卜氏と為す。説易の最初たり」と。案ずるに子夏を舉げ以て衆家を冠す。則ち小王自り以下、齊斧を作さざる無し。『漢書』敘伝「終に齊斧を用う」の注に張晏云く「斧は鉞斧なり。以て天下を整齊するなり」と。又た案ずるに、蔡邕の集太尉橋公碑に「爰に将いて度ること遼にして、亦た齊斧を用う」と。『文選』陳孔璋の呉将校に檄する部曲に云く「要領足らず、以て齊斧を膏す」と。『晋書』楽志に「乃ち元戎を整え、以て齊斧に膏す」と。則ち古人多く齊斧を用う。

［口語訳］

また高禄・権勢（齊斧）を獲得する。（太尉橋公廟碑）

旅に「九四に高禄・権勢（齊斧）を獲得する」とある。これを引用するものは「齊斧」という文字に作る。『経典釈文』に「子夏伝には、人々は「齊斧」に作る、とある。張軌は「齊斧」は思うに黄金のまさかりであろう、と。張晏は「整」は「齊」である、という。応劭は「齊」は「利」である、という。虞喜『志林』には、「齊」は当然「齋」に作るべきである、とある。ものいみ（齋戒）して廟に入り斧を受ける。下の卦は同じ」と。沈欽韓は「案ずるに、『釈言』に「劑」「翦」は「齊」である」という。郭は「南方の人は「翦刀」を呼んで「劑刀」とする」という。『説文解字』に「翦は齊断である」とある。「齊斧」の文字の意味は斬り断つことである。虞喜は、「齋」は「戒」であるというのは誤りである、という。錢坫は「『易経』の「資斧」は子夏伝には「齊斧」に作る」という。『周礼』攷工記に「四方の珍異な品物を調達して有無を通じる」の鄭玄注に「古い書物には「資」は「齊」に作る」とある。これは「資」と「齊」とは通用しているということである。宋翔鳳は「考えるに、陸氏は子夏を卜氏とする。『易経』を説くものの最初である」という。考えるに、子夏を挙げて民衆を衆家の頭とする。つまり小王からは「齊斧」としないものはない。『漢書』敘伝の「とうとう「齊斧」を用いる」の張晏注に「斧は鉞斧である。天下を整齊する」とある。また考えるに、蔡邕の集太尉橋公碑に「ここで軍隊を率いてはるか彼方の他国に遠征し、齊斧を用いる」とある。『文選』陳孔璋の呉の軍隊の指揮官の部隊へのふれ文に「腰と首は天下の斧（齊斧）を血塗らすには値しない」という。『晋書』楽志には「私の兵車を整備して、天下の斧（齊斧）を血塗らす」とある。つまり、古人は多く「齊斧」の文字を用いる。

［注］

1子夏伝～作齊斧…子夏は卜商のこと。『史記』弟子列伝に卜商伝があるが、ここからは引用していない。

2張軌…晋の烏氏の人。字は士彦。諡は武。張華が経義と政治を教えた。

3張晏…三国魏の中山の人。字は子傅。著書に『西漢書音釈』がある。

4応劭…後漢の汝南南郡の人。字は仲達。著書に『漢官儀』『風俗通義』がある。
5虞喜…晋の会稽余姚の人。経伝・讖緯に詳しく、毛詩・孝経の注釈がある。
6志林…『志林新書』のこと。玉函山房輯佚書に収められている。
7説文翦～取斬断…『説文解字』には「翦は羽生ゆるなり」とあり、その段玉裁注に「翦なる者は前なり。前なる者は断齊なり」とある。ここは、段注を引用したもの。
8錢坫…清の嘉定の人。大昕の子。字は献之。著書に『史記補注』がある。
9宋翔鳳…清の長洲の人。字は于庭。段玉裁に師事した。著書に『浮溪精舎叢書』がある。
10小王…『春秋左氏伝』定公十四年の「士鮒周に奔り、小王桃甲朝歌に入る」の小王か。
11漢書敘～鉞斧也…敘伝の「東南を戒（いまし）むと雖も、終に齊斧を用う」の張晏注に「齊斧は越斧なり。以て天下を整齊するなり」とある。
12蔡邕…後漢の陳留（河南省）の人。字は伯喈。辞章・数術・天文を好み、音律に通じて琴をよくした。霊帝のときに郎中となり、熹平四年（一七五）楊賜らとともに五経文字を奏定して碑に刻して太学門外に立てた。著書に『独断』二巻・『蔡中郎集』十二巻がある。
13陳孔璋…三国魏の広陵の人。孔璋は字。建安七子の一人。
14晋書楽～膏齊斧…楽志下にある、曹毗の作った「歌景帝」の一節。

84　**［本　文］**

斉斧罔設。（太尉橋公碑陰征鉞文）[1]

錫瑞案、蔡中郎集有黄鉞銘、為橋公作。銘曰、帝命将軍、秉茲黄鉞。又曰、斉斧罔設人士斯休拠。水経漢太尉橋元墓[2]列数碑、第三碑陰有鼎銘文[3]曰、故臣門人相与述公之行咨度体。則文徳銘于三鼎、武功勒于征鉞、書于碑陰、以昭公懿。又有鉞文、称是用鏤石假象、作茲征鉞軍鼓、陳之于東階、亦以昭公之文武之勲焉。其文与蔡集同。是中郎黄鉞銘已刻於橋公碑陰矣。以斉斧為黄鉞。与張軌之説同。橋公廟碑亦伯喈作正言。橋公之事其云斉斧亦必為黄鉞無疑。漢書王莽伝、亡其黄鉞。尋士房揚素狂直、迺哭曰、此経所謂喪其斉斧者也、注応劭曰、斉利也。亡其利斧、言無以復断斬也。則以斉斧為黄鉞、古義相伝如是。伯喈之説出於西京。

［訓　読］

斉斧設くる罔し。（太尉橋公碑陰征鉞文）

錫瑞案ずるに『蔡中郎集』に黄鉞銘有りて、橋公の作と為す。銘に曰く「帝将軍に命じ、茲の黄鉞を秉る」と。又た曰く「斉斧は人士の斯の休拠を設くる罔し」と。『水経』漢太尉橋元墓列数碑第三碑陰に鼎の銘文有りて曰く「故の臣の門人、相い与に公の行・咨・度・体を述ぶ。則ち文徳は三鼎に銘し、武功は征鉞に勒み、碑陰に書き、以て公の懿を昭らかにす。又た鉞文有り、称して是れ鏤石假象を用い、茲の征鉞軍鼓を作り、之を東階に陳（つら）ね、亦た昭公の文武の勲を以てす」と。其の文は『蔡集』と同じ。是れ中郎黄鉞銘は已に橋公碑陰に刻す。「斉斧」を以て「黄鉞」と為す。張軌の説と同じ。橋公廟碑も亦た伯喈正言を作す。橋公の事は其れ云く、「斉斧」も亦た必ず「黄鉞」と為すは疑い無し。『漢書』王莽伝「其の黄鉞を亡う。尋の士房揚素（もと）より狂直、迺ち哭して曰く、此の経はいわゆる其の斉斧を喪う者なり」の注に応劭曰く「斉は利なり。其の利斧を亡い、以て復た断斬する無きを言うなり」と。則ち「斉斧」を以て「黄鉞」と為し、古義相い伝うこと是の如し。伯喈の説は西京より出づ。

［口語訳］

高禄・権勢は備えることがない。（太尉橋公碑陰征鉞文）

私が考えるに、『蔡中郎集』に黄鉞の銘文があって、橋公の作としている。その銘文には「帝は将軍に命じ、この黄色の鉞を守らせた」という。また「斉斧は士たる行のある人々の休む場所を設けることはしない」という。『水経』漢太尉橋玄墓列数碑の第三碑の碑陰に鼎の銘文があって「元の弟子たちは、互いに行動・性質・度量・形を述べあっていた。そして学問文教の徳は三つの鼎に鋳銘し、軍事の手柄はまさかりに勒み、碑陰に書き、そして橋公の立派さを明らかにした。またまさかりの銘文があり、これは金属や石・仮の形を用い、この征伐のためのまさかり・軍隊の太鼓を作り、これらを東の階上に陳列し、昭公の文武の勲功を明らかにした」という。その文章は『蔡中郎集』と同じである。中郎黄鉞の銘は既に橋公碑の碑陰に刻されている。「斉斧」を「黄鉞」とする。張軌の説と同じである。橋公廟碑のことも、蔡邕は道理に合った正義の言葉を残している。橋公の事は、「斉斧」もまた必ず「黄鉞」としていることは疑いがないと言っている。『漢書』王莽伝の「その「黄鉞」を亡失した。尋の子弟の房揚はもともと正直一徹の人、されば泣いて、これは経典にいわゆるその斉斧をなくしたものである」の応劭の注に「斉は利である。その利斧を亡失し、また断ち斬ることがないことを言う」とある。つまり「斉斧」を「黄鉞」とし、古い解釈が伝えあっていることはこのようである。蔡邕の説は長安から出ている。

［注］

1太尉橋公碑陰征鉞文…不明。

2橋元墓…橋玄墓の誤り。

3水経漢～鼎銘文…『水経』睢水に「光和元年、主記の椽李反、字は仲遼、碑文を作る。碑陰に右鼎文有り。建寧三年司空を拝し、また中鼎文有り。建寧四年司徒を拝し、また左鼎文有り。元和元年太尉を拝し、鼎の名文に曰く、…」とある。ここは、これを踏まえて作られている。

85　［本　文］

説以犯難。（荊州刺史度尚碑）

見兌卦。

［訓　読］

説(よろこ)びて以て難を犯す。（荊州刺史度尚碑）

兌卦に見ゆ。

［口語訳］

君主が喜んで困難に当たる。（荊州刺史度尚碑）

兌卦に見ることができる。

86　［本　文］

朝夕講習。（元儒先生婁寿碑）

講習見兌卦。[1]

［訓　読］

朝夕講習す。（元儒先生婁寿碑）

「講習」は兌卦に見ゆ。

［口語訳］

朝晩学問を研究する。（元儒先生婁寿碑）

「講習」は兌卦に見ることができる。

［注］

1講習見兌卦…ここには「君子以て朋友講習す」とある。

87　［本　文］

…欠字…我好爵。（都郷正街弾碑[1]）

中孚、我有好爵。朱百度案、碑我作我、爵作爵。華山廟碑雨我農桒。校官碑恵我藜蒸、字皆作我。孔龢碑[2]皆備爵、大常丞[3]、礼器碑爵鹿柤桓、字皆作爵。並与此合。錫瑞案、此碑為都郷正街弾碑。趙氏誤認為衛[4]。洪氏已糾正之。朱百度仍沿趙氏之誤云、衛弾碑今改正[5]。詳見周礼攷。

［訓　読］

…欠字…我好き爵あり。（都郷正街弾碑）

中孚に「我好き爵有り」と。朱百度案ずるに、碑の「我」は「我」に作り、「爵」は「爵」に作る。華山廟碑「我が農桒に雨す」、校官碑「我が藜蒸に恵す」の字は皆な「我」に作る。孔龢碑「皆な爵を備え、大常・丞」、礼器碑「爵・鹿・柤・桓」は、字は皆な「爵」に作る。並びに此と合す。錫瑞案ずるに、此の碑は都郷正街弾碑為り。趙氏誤認して「衛」と為す。洪氏已に之を糾正す。朱百度仍ち趙氏の誤に沿いて云く、衛弾碑今改正す。詳しくは『周礼攷』に見ゆ。

［口語訳］

…欠字…私に立派な杯（爵）がある。（都郷正街弾碑）

中孚に「私に立派な杯（爵）がある」とある。朱百度が考えるに、碑の「我」は「我」に作り、「爵」は「爵」に作る。華山廟碑「私（我）の田と桑畑に雨が降る」、校官碑「私（我）の粗末な食物に恵みを与える」の文字はすべて「我」に作る。孔龢碑の「すべて杯（爵）を備え、大常・丞は…」、礼器碑の「爵・鹿・柤・桓」は、文字はすべて「爵」に作る。これと合致する。私が考えるに、この碑は都郷正街弾碑である。趙氏は誤認して「衛」とする。洪氏はすでにこのことを是正している。朱百度は私は重ねて趙氏の誤ちに沿っていい、衛弾碑を今改正する。詳しくは『周礼攷』に見ることができる。

［注］

1都郷正街弾碑…霊帝の中平二年（一八五）の刻。『隷釈』巻十五に銘文が載せられている。

2孔龢碑…桓帝の元嘉元年（一五三）の刻。『隷釈』巻一に「孔廟置守廟百石孔龢碑」として掲載されている。

3孔龢碑～大常丞…孔龢碑のここには「大常・丞は祠を覧る」と銘文がある。

4趙氏誤認為衛…趙氏とは趙明誠のこと。北宋の元豊四年（一〇八二）から南宋の建炎三年（一一二九）。諸城の人、字は徳父、書室を帰来室といった。湖州軍州の知を歴官した。著書に『金石録』三十巻、『古器物銘』十五巻がある。ここで趙明誠が誤認したのは、『金石録』に見られる。『金石録』は、所蔵の三代の彝器・漢代以来の石刻を、目及び撰人・年月を記し、考証を加えたもの。欧陽脩の『集古録跋尾』にならって排比し、前の十巻は凡て二百種の目を揚げ、後の二十巻は諸家考証の弁証である。その死後妻李清照が稿を続け、紹興年間中に朝廷に奉った。ちなみに、『金石録』には第百八十四に「漢都郷正街弾碑」とある。

5洪氏已～今改正…洪氏は洪适、その著書『隷釈』の中で趙明誠の誤りを指摘している。巻十五の「都郷正衛弾碑」に「趙氏誤認して衛を街と為す。遂に云く、其れ何の碑たるか暁かにするなし」とある。後の部分からは、朱百度が趙明誠の説と洪适の説を取り違えていることが分かる。

88　［本　文］

喪過乎哀。（博陵太守孔霊碑）　喪能過哀。（費亭侯曹騰碑陰）[1]

見小過。

［訓　読］

喪は哀に過ぐ。（博陵太守孔霕碑）　喪は能く哀に過ぐ。（費亭侯曹騰碑陰）

小過に見ゆ。

［口語訳］

親の喪に服するときは悲しみにすぎるくらいにする。（博陵太守孔霕碑）　親の喪に服するときはよく悲しみにすぎるくらいにする。（費亭侯曹騰碑陰）

小過に見ることができる。

［注］

1費亭侯曹騰碑陰…曹騰は後漢の譙の人で、字は季興。官は順帝の時、中常侍・大長秋となる。四帝に歴事し、賢能を進達した。桓帝の時に、費亭侯に封ぜられ、魏の太和年中に高帝と追尊された。その曹騰の碑。

89　［本　文］

用過乎俠。（陳太邱碑）　喪事惟約用過乎俠。（太邱長文範先生碑）[1]

見小過。

［訓　読］

用は俠に過ぐ。（陳太邱碑）　喪事は惟だ約めて用て俠に過ぐ。（太邱長文範先生碑）

小過に見ゆ。

［口語訳］

実用は節約して俠約に過ぎるくらいにする。（陳太邱碑）　葬儀は簡単にし過ぎるくらいにする。（太邱長文範先生碑）

小過に見ることができる。

［注］

1太邱長～先生碑…文範先生は後漢の陳寔の謚。後漢の許の人である。一に陳實に作る。字は仲弓。太丘長となった。

90　［本　文］

昔殷王武丁久伐鬼方。（敦煌長史武斑碑）

既済、九三高宗伐鬼方、三年克之。

［訓　読］

昔殷王武丁久しく鬼方を伐つ。（敦煌長史武斑碑）

既済に「九三高宗鬼方を伐ち、三年にして之に克つ」と。

［口語訳］

昔、殷王武丁は、鬼方という異民族を征伐した。（敦煌長史武斑碑）

既済に「九三に高宗（武丁）は、鬼方という異民族を征伐したが、三年経ってやっと勝つことができた」とある。

91　［本　文］

至于東皿大宅戕仁。（安平相孫根碑）

既済、九五東鄰殺牛。隷釈云、説文音皿、為喧。[1]案班孟堅幽通賦云、東丛虐而殲仁注云、丛古鄰字。謂紂也。仁即三仁也。[2]碑中之語蓋出於此。則是以皿為丛、以戕為殲、或為戕也。隷弁、案諸碑従丛之字、或書作口、故丛亦為皿、書益稷臣哉鄰哉、鄰哉臣哉、古文尚書作丛哉、漢書敘伝亦丛慝、而助信。師古曰、丛古鄰也。[3]又衡立碑宣享難老彭祖為皿。鄰亦作皿。錫瑞案、皿即鄰字。二説詳矣。東鄰謂紂。見礼坊記引易此文。[6]鄭注曰、東鄰謂紂国中也。西鄰謂文王国中也。漢書注応劭曰、東丛紂也。[7]李鼎祚集解載崔憬説亦以有周受命之日為言。孔穎達左伝疏及易八論拠此以爻辞為周公作。謂説者皆云、西鄰謂文王東鄰謂紂。皆可為此碑東皿之証。

［訓　読］

東皿大宅仁を戕ぼすに至る。（安平相孫根碑）

既済に「九五に東鄰の牛を殺す」と。『隷釈』に云く「『説文』に音は皿、喧と為す、と。案ずるに、班孟堅の幽通賦に云く「東屮虐して仁を殲ぼす」の注に云く「「屮」は古の「鄰」の字。紛を謂うなり。仁は即ち三仁なり」と。碑中の語は蓋し此より出ず。則ち是れ「皿」を以て「屮」と為し、「戕」を以て「殲」と為し、或いは「戕」と為すなり。『隷弁』に「案ずるに諸碑は「屮」に従うの字。或いは書きて「口」に作り、故に「屮」も亦た「皿」と為す。『書』益稷に、臣なるかな鄰なるかな、鄰なるかな臣なるかな、と。『古文尚書』に「屮哉」に作る。『漢書』敘伝も亦た悳を屮け、信を助く、と。師古曰く、「屮」は古の「鄰」なり、と。又た衡立碑に、宜しく難老の彭祖に享り皿と為すべし、と。「鄰」も亦た「皿」に作る」と。錫瑞案ずるに、「皿」は即ち「鄰」の字。二説は詳らかなり。東鄰は紂を謂う。『礼』坊記を見るに『易』の此の文を引く。鄭注に曰く「東鄰は紂の国中を謂うなり。西鄰は文王の国中を謂うなり」と。『漢書注』に応劭曰く「東屮は紂なり」と。李鼎祚『集解』に崔憬説を載するも、亦た周の命を受くるの日有るを以て言を為す。孔穎達『左伝疏』及び『易八論』は此に拠れば爻辞を以て周公の作と為す。説を謂う者皆な云く、西鄰は文王を謂い、東鄰は紂を謂う。皆な此の碑の東皿の証為るべし。

［口語訳］

東土の殷（東皿）が大宦し仁を滅ぼすに至る。（安平相孫根碑）

既済に「九五に東土の殷（東鄰）が牛を殺して供え物とする」とある。『隷釈』には「『説文解字』に音は皿、喧とするとある。考えるに、班孟堅の幽通賦の「東土の殷（東屮）が虐げて仁を滅ぼす」の李善注には「「屮」は古の「鄰」の字である。紂をいう。仁はつまり三仁である」とある。碑中の語は思うにこれから出ているのであろう。つまり、「皿」を「屮」となし、「戕」を「殲」となし、あるものは「戕」としている。『隷弁』に「考えるに、諸碑は「屮」に従う文字である。あるものは「口」に作るので、「屮」もまた「皿」とする。『書経』益稷篇に、臣であることよ親しい者（鄰）であることよ、親しく（鄰）あれよ臣であれよ、とある。『古文尚書』には「屮哉」に作る。『漢書』敘伝にも、また善行・善心を助け（屮）、信実至誠の者を助ける、とあり、顔師古は、「屮」は古の「鄰」である、という。また衡立碑には、長寿を保つ彭祖に供えて助け（皿）とするのがよい、とある。「鄰」もまた「皿」に作る」とある。私が考えるに、「皿」はつまり「鄰」の文字である。二説は詳しい。東鄰は紂のことを言う。『礼記』坊記篇を見るに『易経』のこの文を引いている。その鄭玄注には「東鄰は紂の国中をいう。西鄰は文王の国中をいう」とある。『漢書注』には応劭は「東屮は紂である」という。李鼎祚の『易経集解』には崔憬の説を載せているが、周の王が天命を受けて天子となる日があるので説を立てている。孔穎達『春秋左伝正義』と『易八論』は、これによると、爻辞を周公の作とする。この説をいう者はみな、西鄰は文王であり、東鄰は紂であるという。すべてこの碑の東皿の証拠とできる。

［注］

1説文音皿為喧…『説文解字』の「皿」には「驚き嘩ぶなり、二の口に従う。凡そ皿の属皆な皿に従う。読みて讙の若くす」とあり、「鄰」には「五家鄰と為す。邑に従い粦の声」とある。ここの本文はどこから引用しているのか不明である。

2屮古鄰～三仁也…李善注に「曹大家曰く、東鄰は紂を謂うなり。殲は盡なり。仁は三仁を謂うなり」とある。また「三仁」は『論語』微子篇に「微子は之を去り、箕子は之が奴と為り、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁有りと」とあり、微子・箕子・比干という殷末の三人の忠臣。

3漢書敘～古鄰也…『漢書』序伝の上に「先聖の大繇を謨（はか）り、亦た悳（とく）を屛（たす）け、信を助く」とあり、その顔師古注に「屛は古の鄰の字なり」とある。ここでは、助ける意と解釈されている。

4衡立碑…『隷釈』巻十二に「浚儀令衡立碑」として銘文が載せられている。

5彭祖…古代の長寿者で姓は錢。名は鏗。陸終氏の第三子。帝顓頊の孫。

6見礼坊～易此文…『礼記』坊記篇に「易に曰く、東鄰の牛を殺すは、西鄰の禴祭して寔にその禍を受くるに如かず」とある。

7漢書注～屛紂也…『漢書』序伝の「東屛虐して仁を殲ぼす」の注にある。

8李鼎祚…唐の資州の人。官は著作郎・秘園学士。『周易集解』を作った。

9孔穎達…唐の冀州衡水（河北省）の人。字は仲達。諡は憲。孔子三十二世の孫。服氏春秋・鄭氏尚書・詩・礼記・王氏易に通じた。隋末に明経に挙げられ、唐になって国士司業、祭酒となった。魏徵とともに『隋史』を編纂し、太宗の命を受けて顔師古等と『五経正義』を撰した。

92　［本　文］

礿祭之福。（西嶽華山廟碑）

既済、不如西鄰之禴祭、実受其福。碑引禴作礿者。朱百度案、詩天保篇禴祠烝嘗釈文云、本又作礿。礼王制篇春曰礿[1]注引詩作礿[2]。公羊桓公八年伝夏曰礿釈文云、本又作禴[3]。穀梁桓公八年伝夏祭曰禴釈文又作礿。爾雅釈詁篇禴祭也釈文云、字又作礿。又釈天篇夏祭曰礿釈文云本或作禴。是礿与禴同。

［訓　読］

礿祭の福。（西嶽華山廟碑）

既済に「西鄰の禴祭して、実をもて其の福を受くるに如かず」と。碑に「禴」を引き「礿」に作る者あり。朱百度案ずるに『詩』天保篇「禴祠烝嘗」の『釈文』に云く「本と又た「礿」に作る」と。『礼』王制篇「春をば礿と曰う」の注に『詩』を引きて「礿」に作る。『公羊』桓公八年伝「夏をば礿と曰う」の『釈文』に云く「本と又た「禴」に作る」と。『穀梁』桓公八年伝「夏祭をば禴と曰う」の『釈文』に「又た「礿」に作る」と。『爾雅』釈詁篇「禴は祭なり」の『釈文』に云く「字は又た「礿」に作る」と。又た釈天篇「夏祭をば礿と曰う」の『釈文』に云く「本と或いは「禴」に作る」と。是れ「礿」と「禴」とは同じ。

［口語訳］

お供え物の貧弱な質素な祭りをして福が下る。（西嶽華山廟碑）

既済に「西土の周が先祖を祭るにあたって、お供え物の貧弱な質素な祭り（禴祭）をして、ただ誠意がこもっているので、神が至誠を喜んでこれに福を下すのに及ばない」とある。碑に「禴」を引いて「礿」に作るものがある。朱百度が考えるに、『詩経』鹿鳴之什、天保篇「禴祠烝嘗の四時の祭り」の『経典釈文』には「もともとまた「礿」に作る」とある。『礼記』王制篇「春の祭を礿という」の鄭玄注に『詩経』を引いて「礿」に作る。『春秋公羊伝』桓公八年に「夏の祭を礿という」の『経典釈文』に「もとまた「禴」に作る」と言う。『春秋穀梁伝』桓公八年「夏祭を禴という」の『経典釈文』に「また「礿」に作る」とある。『爾雅』釈詁篇「禴は祭である」の『経典釈文』に「文字はまた「禴」に作る」とある。また、釈天篇「夏祭を礿という」の『経典釈文』に「もとあるものは「礿」に作る」とある。これは、「礿」と「禴」とは同じということである。

［注］

1礼王制篇春曰礿…『礼記』王制篇に「天子諸侯の宗廟の祭は、春を礿と曰い、夏を禴と曰い、秋を嘗と曰い、冬を烝と曰う」とある。
2注引詩作礿…鄭玄注には「此れ蓋し夏・殷の祭名、周則ち之を改め、春を祠と曰い、夏を禴と曰う。詩小雅に曰く、禴祠烝嘗、公先王に于す、と。此れ周の四時の宗廟を祭るの名なり」とある。
3釈文云～又作禴…『経典釈文』第二十一「曰礿」に「予若の反。又た禴に作るも同じ」とあり、ここの引用と文字が異なる。

93

［本　文］

辯物居方。（博陵太守孔霆碑）

未済、君子以慎辨物居方。此引辨作辯。朱百度案、虞本象下伝作辯物、注云、辯別也。繫辞下伝辯[1]。老子銘作辯是与非[2]。虞本亦作辯。周礼天官辨方正位、釈文云、辨本亦作辯。張衡東京賦辯方位而正。則是辯与辨同。

［訓　読］

物を辯じ、方に居く。（博陵太守孔霆碑）

未済に「君子以て慎みて物を辨じ方に居く」と。此れ「辨」を引きて「辯」に作る。朱百度案ずるに、虞本の象下伝に「辯物」に作り、注に云く「辯は別なり」と。繫辞下伝に「辨」と。老子銘は「辯ずるに是れ与に非なり」に作る。虞本も亦た「辯」に作る。『周礼』天官「方を辨じ位を正す」の『釈文』に云く「「辨」は本と亦た「辯」に作る」と。張衡の東京賦「方位に辯じ正す」と。則ち是れ「辯」と「辨」とは同じ。

［口語訳］

それぞれの物を区別（辯）し、その性質のかなった所に置く。（博陵太守孔霆碑）

未済に「君子は慎重に物の性質を区別（辨）し、それぞれの物をその性質にかなった所に置く」とある。この碑は「辨」を引いて「辯」に作る。朱百度が考えるに、虞翻本の象下伝に「辯物」に作り、注には「辯は別なり」という。繫辞下伝に「辨」とある。老子銘に「区別（辯）するにこれはともに誤りである」に作る。虞本もまた「辯」に作る。『周礼』天官「方向を弁別（辨）し、宮室の位置を制定する」の『経典釈文』には「「辨」はもとまた「辯」に作る」とある。張衡の東京賦は「中央と東西南北の五方と神位を見分け（辯）、礼法どおりに正しく定める」とある。つまり、「辯」と「辨」とは同じである。

［注］

1繫辞下伝辨……例えば、「微を顕らかにし幽を闡き、開きて名を当て物を辨じ、言を正し辭を断ず」とあるなど。
2老子銘～是与非…原文では「是与非老子銘作辯」となっているが、老子銘（『隷釈』巻三所収）には「至人は辯ずるに是れ与に非なり」とある。これからここは、原文の過ちと考え、語順を変える。

94

［本　文］

乾巛定位。（西嶽華山廟碑）　惟巛霊定位。（司隷校尉楊孟文石門頌）巛霊既定。（樊毅脩華嶽碑）

繫辞、乾坤定矣。此引坤作巛。又作巛。釈文、坤本又作巛。巛今字也。王引之曰、説文坤地也。易之卦也。従土従申。土位在申。是乾坤字正当作坤。其作巛者、乃是借用川字。攷漢孔龢碑・堯廟碑・史晨奏銘・魏孔羨碑[1]之乾坤、衡方碑之剥坤、郙閣頌之坤兌、字或作巛、或作巛、或作川。皆隷書川字。是其借川為坤。顕然明白川為坤之假借而非坤之本字。故説文坤字下無重文作巛者。玉篇坤下亦無巛字。而於川部巛字下注曰、注読曰川也。古為坤字。然則本是川字。古人借以為坤耳。坤得借用川字者。古坤川之声、並与順相近。説卦伝、

乾健也。坤順也。乾与健声近。坤与順声近。乾象伝、天行健。健即是乾。坤象伝、地勢坤。坤即是順。是坤与順声相近也。大雅雲漢篇、滌滌山川与焚熏聞遯為韻[2]。説文順訓馴紃輒巡等字、皆従川声[3]。是川与順声亦相近也。坤順川声並相近。故借川為坤。川字篆文作巛。故隷亦作巛。朱百度案隷書無坤字。碑文中如孔廟奏銘。乾巛所挺石門頌惟巛霊定位。字並作巛。堯廟碑乾川見徴、霊台碑則[4]乾川之象、張公神碑則乾剖川霊又…上欠…乾川、三公山碑建立乾川又川為物母、郁閣頌川兌之間、造橋碑乾川垂極、又皆作川。孔龢碑則象乾川、衡方碑威粛剥川、劉熊碑寔惟乾川、呉仲山碑[5]乾川蓋載、周憬銘[6]乾川剖兮建両儀、又皆作川。張納碑…上欠…乾川又変作川。華山廟碑川定位又変作川。魏脩孔廟碑崇祀乾巛、受禅表乾巛、上尊号奏上[7]降乾祉下発、巛珍又変作巛。是皆借川為坤明矣。

［訓　読］

乾巛位を定む。（西嶽華山廟碑）　惟れ巛霊位を定む。（司隷校尉楊孟文石門頌）　川霊既に定まる。（樊毅脩華嶽碑）

繫辞に「乾坤定まる」と。此れ「坤」を引きて「巛」に作る。又た「巛」に作る。『釈文』に「「坤」は本と又た「巛」に作る」と。「巛」は今字なり。王引之曰く「『説文』に坤は地なり。『易』の卦なり。土に従い申に従う。土位は申に在り。是れ乾坤の字は正しくは当に「坤」に作るべし。其れ「巛」に作る者は、乃ち是れ「川」字を借用す。攷うるに漢の孔龢碑・堯廟碑・史晨奏銘・魏孔羨碑の「乾坤」、衡方碑の「剥坤」、郁閣頌の「坤兌」は、字は或いは「川」に作り、或いは「巛」に作り、或いは「川」に作る。皆な隷書の「川」の字。是れ其れ「川」を借りて「坤」と為す。顕然明白なること「川」は「坤」の假借為りて、「坤」の本字に非ず。『説文』の「坤」字の下に重文無く「巛」なる者に作る。『玉篇』の「坤」の下も亦た「巛」字無し。而して「川」部「巛」字の下の注に於て曰く、「注して読みて曰く「川」なり」と。古は「坤」字為り。然れば則ち本と是れ「川」字。古人借りて以て「坤」と為すのみ。「坤」は得て「川」字を借用する者。古の「坤」は「川」の声、並びに「順」と相い近し。説卦伝に「「乾」は「健」なり。「坤」は「順」なり」と。「乾」と「健」とは声近し。「坤」と「順」とは声近し。乾の象伝「天行は健」と。「健」は即ち是れ「乾」。坤の象伝に「地勢は坤」と。「坤」は即ち是れ「順」。是れ「坤」と「順」とは声相い近きなり。大雅雲漢篇「山川を滌滌す」と「焚」「熏」「聞」「遯」は韻を為す。『説文』の「順」「訓」「馴」「紃」「輒」「巡」等の字は、皆な「川」の声に従う。是れ「川」と「順」声とも亦た相い近きなり。「坤」「順」「川」の声は並びに相い近し。故に「川」を借りて「坤」と為す。「川」字の篆文は「巛」に作る。故に隷も亦た「巛」に作る」と。朱百度案ずるに、隷書に「坤」字無し。碑文中の孔廟奏銘の「乾巛の挺く所」、石門頌の「惟だ巛霊位を定む」の如し。字は並びに「巛」に作る。堯廟碑の「乾川徴を見す」、霊台碑の「則ち乾川の象」、張公神碑の「則ち乾は川霊を剖く又た…上欠…乾川」、三公山碑の「乾川を建立し又た川は物母と為す」、郁閣頌の「川兌の間」、造橋碑の「乾川極を垂らす」は、又た皆な「川」に作る。孔龢碑の「則ち乾川を象る」、衡方碑の「威粛川を剥ぐ」、劉熊碑の「寔に惟れ乾川」、呉仲山碑の「乾川蓋し載す」、周憬銘の「乾川剖れ両儀を建つ」は、又た皆な「川」に作る。張納碑の「…上欠…乾川又た変ず」は「川」に作る。華山廟碑「川位を定む」は又た変じて「川」に作る。魏脩孔廟碑の「乾巛を崇祀す」、受禅表の「乾巛」、上尊号奏上の「乾の祉を降し下に発す」の「巛」は「珍」、又た変じて「巛」に作る。是れ皆な「川」を借りて「坤」と為すは明らかなり。

［口語訳］

乾坤（巛）の二卦が定まる。（西嶽華山廟碑）　地（巛）の神が位を定める。（司隷校尉楊孟文石門頌）　坤（巛）の霊はすでに定まった。（樊毅脩華嶽碑）

繫辞に「乾坤の二卦が定まる」とある。これは「坤」を引いて「巛」に作る。また「巛」に作る。『経典釈文』に「「坤」はもとまた「巛」に作る」とある。「巛」は今字である。王引之は「『説文解字』に「坤」は「地」である。『易経』の卦である。土に従い申に従う。土位は申にある、とある。そもそも「乾坤」の字は正しくは当然「坤」に作るべきである。「巛」に作る文字は、つまり「川」字を借用したものである。私が考えるに、漢の孔龢碑・堯廟碑・史晨奏銘・魏孔羨碑の「乾坤」、衡方碑の「剥坤」、郙閣頌の「坤兌」は、文字はあるものは「巛」に作り、あるものは「巛」に作り、あるものは「川」に作る。すべて隷書の「川」の文字である。これは「川」を借りて「坤」としている。「川」は「坤」の仮借であり、「坤」の本字ではないことは明らかである。『説文解字』の「坤」字の下に重文はなく「巛」という文字に作る。『玉篇』の「坤」の下にも「巛」の文字はない。「川」部の「巛」字の下の注に「注に「川」という」とある。古は「坤」の文字である。つまりもともと「川」字である。古人は借りて「坤」とするだけである。「坤」は「川」字を借用する文字である。古の「坤」は「川」の音声であり、「順」と近い。説卦伝に、「乾」は剛健である。「坤」は柔順である、とある。「乾」と「健」とは音声は近い。「坤」と「順」とは音声は近い。乾の象伝に、天の雲行は一日一周し、休息することがなく疲れることがない、とある。「健」はつまり「乾」である。坤の象伝に、地の形勢は坤の象である、とある。「坤」はつまり「順」である。「坤」と「順」とは音声が互いに近い。『詩経』大雅雲漢篇に、山川は洗ったようになっていて、一水一木もない、とある「川」の文字と「焚」「熏」「聞」「遯」は韻を踏んでいる。『説文解字』の「順」「訓」「馴」「紃」「輒」「巡」等の文字はすべて「川」の音声に従う。これは「川」と「順」の音声も互いに近いということである。「坤」「順」「川」の音声は互いに近い。だから、「川」を借りて「坤」とする。「川」の篆文は「巛」に作る。だから隷書でも「巛」に作る」といっている。朱百度が考えるに、隷書に「坤」の文字はない。碑文中の孔廟奏銘の「乾巛の優れた所」、石門頌の「地の神（巛霊）が位を定める」のようである。文字は両者とも「巛」に作る。堯廟碑の「乾川はしるしを表す」、霊台碑の「乾川の象」、張公神碑の「乾は川霊を強くしてまた…上欠…乾川」、三公山碑の「乾川を建立し又た坤（川）は物母とする」、郙閣頌の「西南（川）から西の間」、造橋碑の「乾川は天地宇宙の根本を伝える」は、またすべて「川」に作る。孔龢碑の「乾巛を象る」、衡方碑の「脅して巛をはぎ取る」、劉熊碑の「誠にこれは乾巛である」、呉仲山碑の「乾巛は載せる」、周憬銘の「乾巛が割れて陰陽を建てた」は、またすべて「巛」に作る。張納碑の「…上欠…乾巛がまた変わる」は「巛」に作る。華山廟碑の「巛は位を定める」は、また変化して「巛」に作る。魏の脩孔廟碑の「乾巛を尊び祭る」、受禅表の「乾巛」、上尊号奏上の「乾の幸福を降し下に開く」の「巛」は珍しく、また変化して「巛」に作る。これはすべて「川」を借りて「坤」とするのは明らかである。

［注］

1魏孔羨碑…魏の黄初元年（二二〇）の刻。隷書二十二行、一行四十字、篆額に「魯孔子廟之碑」と六字がある。孔子二十世の孫孔羨を封じて宗聖侯とし、釈典を司らしめ、かつ孔子廟を修理させた時の記念碑で、「修孔子廟碑」「宗聖孔羨碑」ともいう。山東省曲阜の孔子廟に現存する。

2大雅雲～遯為韻…『詩経』大雅、蕩之什、雲漢篇に「旱既大甚、滌

滌山川（旱既に大甚し、山川を滌滌す）。旱魃為虐、如惔如焚（旱魃虐を為し、惔くが如く焚くが如し）。我心憚暑、憂心如熏（我が心暑に憚る、憂心熏くが如し）。羣公先正、則不我聞（羣公先正、則ち我に聞かず）。昊天上帝、寧俾我遯（昊天上帝、寧ぞ我をして遯れ俾めんとす）」とあり、この句末の五文字が韻を踏んでいることをいう。

3説文順～従川声…『説文解字』に「順は理なり。頁に从い巛に从う」、「訓は説き教うるなり。言に从う、川の声」、「馴は馬順するなり、馬に从う川の声」、「紃は圜采なり。糸に从う川の声。」、「輒は車の約輒なり。車に从い、川の声」とあり、「順」以外はすべて「川の声」である。

4霊台碑…霊帝の建寧五年（一七二）の刻。『隷釈』巻一に「成陽霊台碑」として碑文が掲載されている。

5呉仲山碑…霊帝の熹平二年（一七三）の刻。『隷釈』巻九に「故民呉仲山碑」とあり、銘文が掲載されている。

6周憬銘…霊帝の熹平三年（一七四）の刻。『隷釈』巻四に「桂陽太守周憬功勲銘」とある。

7上尊号奏上…魏の黄初元年（二二〇）の刻と推定されるもの。隷書三十二行、一行四十九字。篆額に「公卿将軍上尊号奏」とあり、丕（後の文帝）に即位を薦めた奏。河南省許昌に現存する。

95　［本　文］

済弘功於易蕑。（泰山都尉孔宙碑）[1]　覆載蕑易。（魏受禅表）

易簡見繫辞。[2]碑引作蕑。朱百度案、書盤庚篇予其懋簡相爾、論語堯曰篇簡在帝心。金石残碑作蕑。費鳳別碑蕑在上帝心、劉君残碑[3]蕑…欠字…心、鄭固碑[4]惡能蕑乎聖心。淮源廟碑蕑略不敬。字皆作蕑可証。

［訓　読］

弘功を易蕑に済す。（泰山都尉孔宙碑）　覆載蕑易なり。（魏受禅表）

「易簡」は繫辞に見ゆ。碑に引きて「蕑」に作る。朱百度案ずるに、『書』盤庚篇に「予其れ懋めて爾を簡相せん」、『論語』堯曰篇に「簡ぶこと帝の心に在り」と。金石残碑に「蕑」に作る。費鳳別碑に「蕑ぶこと上帝の心に在り」、劉君残碑に「蕑…欠字…心」、鄭固碑に「惡能く聖心を蕑ぶ」、淮源廟碑に「蕑略して敬わず」と。字は皆な「蕑」に作るは証す可し。

［口語訳］

大いなる功績を容易に（易蕑）成し遂げる。（泰山都尉孔宙碑）　万物を覆い包む。（魏受禅表）

「容易で少しの困難のない易と、簡単で少しの煩雑もない簡の徳を身につける（易簡）」は繫辞に見ることができる。碑に引用して「蕑」に作る。朱百度が考えるに、『書経』盤庚篇に「予は汝が思いはかっている（簡相）のを勉めてみそなわすであろう」とあり、『論語』堯曰篇「誰に善行があるかの選択（簡）は、すべて天帝の御心に任せて、決して私心を差し挟むことはしません」とある。金石や残碑には「蕑」に作る。費鳳別碑に「選択（蕑）は上帝の心にまかせる」、劉君残碑に「蕑…欠字…心」、鄭固碑に「徳は聖人の心を選択（蕑）する」、淮源廟碑に「選び（蕑）営んで敬わない」とある。文字はすべて「蕑」に作るのは証拠とすることができる。

［注］

1泰山都尉孔宙碑…後漢の桓帝の延熹七年（一六四）の刻。隷書十五行・一行二十八字。碑首は半円形、暈は左右均斉でなく、左方に垂れている。また、穿があり、穿を挟んで左右に二行の篆額がある。碑陰に門生・故吏ら数十人の題名がある。乾隆年間中、山東省曲阜の文廟に移置され、今は同所同文門内に置かれている。

2易簡見繫辞…『易経』繫辞上伝に「易簡にして天下の理を得」とある。
3劉君残碑…不明。
4鄭固碑…後漢の桓帝の延熹元年（一五八）の刻。断石で隷書十五行、一行二十九字。山東省済寧の文廟に保存されている。

96

［本　文］

演易繫辞。（孔廟置百石卒史碑）[1]　揆蓍毄辞。（博陵太守孔霊碑）

繫辞焉而明其吉凶。又繫辞焉以断其吉凶。是故謂之爻。此引繫或作毄辞、或作斐、爻作肴者。隷釈云、毄即繫字。[2] 北海相景君銘、[3]或毄頌於菅蓀。隷弁、案説文繫从糸从毄。碑則省糸。漢書景帝紀無所農桑毄畜、師古曰、毄古繫字。景北海碑陰乃著遺斐。隷弁、案説文斐不受也。从辛从受。与辞説之辞不同。碑蓋通用。隷釈云、以肴為爻。隷弁、案肴与爻同。東坡易伝云、爻者折俎也。古者謂折俎為爻。其文象折俎之形。後世以易有六爻、故加肉為肴以別。朱百度案、繫辞釈文云、繫字従毄。若直作毄下糸者、音口奚反。[4] 非。拠此是陸氏所見本字正作毄。攷毄読若擊。説文作毄云、相擊中也。音中麻切。攷工記廬人、毄兵同強、弓人和弓毄摩鄭注云、毄拂也。此皆用毄字本義。它皆借毄為繫。周礼司門祭祀之牛牲繫焉。校人三皁為繫。繫一馭夫。六繫為廐。廐一僕夫。釈文、並作毄云、毄本又作繫。集韻云、毄与繫同。是也。孔彪碑[5]正作毄。与釈文合足徴。陸説為有本矣。又案下伝理財正辞。劉熊作辞。[6] 景君碑[7]陰乃著遺辞。鄭固碑其辞曰辞並作辞。孔龢碑作繫辞足徴。古人辞辞無別尒。劉氏世説新語云、蔡邕題曹娥碑。黄絹幼婦外孫齏臼解曰、齏臼所以受辛辞字也。[8] 此亦辞作斐之証。

［訓　読］

易を演じ辞を繫く。（孔廟置百石卒史碑）　蓍を揆り辞を毄く。（博陵太守孔霊碑）

「辞を繫けて其の吉凶を明らかにす」と。又た「辞を繫けて以て其の吉凶を断ず」と。是れ故に之を「爻」と謂う。此れ「繫」を引きて或いは「毄辞」に作り或いは「斐」に作り、「爻」は「肴」に作る者なり。『隷釈』に云く「毄は即ち繫の字」と。北海相景君銘に「或いは毄ぎて菅蓀を頌む」と。『隷弁』に「案ずるに『説文』に「繫」は糸に从い毄に从う。碑は則ち「糸」を省く。『漢書』景帝紀「桑を農する所無く、畜を毄ぐ」と。師古曰く「「毄」は古は「繫」の字」と。景北海碑陰に「乃ち遺斐を著す」と。『隷弁』に「案ずるに『説文』に斐は受けざるなり。辛に从い受に从う。辞説の辞と同じからず。碑は蓋し通用す」と。『隷釈』に云く「「肴」を以て「爻」と為す」と。『隷弁』に「案ずるに「肴」と「爻」とは同じ。東坡『易伝』に云く、「爻」なる者は折俎なり。古は折俎を謂いて「爻」と為す。其の文は折俎の形を象る。後世『易』に六爻有るを以て、故に肉を加え「肴」と為し以て別つ」と。朱百度案ずるに、繫辞の『釈文』に云く「「繫」字は「毄」に従う。若し直ちに「毄」の下の糸を作る者あれば、音は口奚の反。非なり」と。此に拠れば是れ陸氏見る所の本の字は正に「毄」に作る。攷うるに「毄」は読むこと「撃」の若し。『説文』に「毄」に作りて云く、相い撃中するなり。音は中麻の切。攷工記の廬人「毄兵強を同じくす」、弓人「弓を和し毄摩す」の鄭注に云く「毄は拂なり」と。此れ皆な「毄」字の本義を用う。它皆な「毄」を借りて「繫」と為す。『周礼』司門「祭祀の牛牲は繫ぐ」と。校人「三皁を繫と為す。繫に一馭夫あり。六繫を廐と為す。廐に一僕夫あり」と。『釈文』に「並びに「毄」に作りて云く、「毄」は本と又た「繫」に作る」と。『集韻』に云く「「毄」と「繫」とは同じ」と。是なり。孔彪碑に正に「毄」に作る。『釈文』と合するは徴するに足る。陸説は本

有りと為す。又た案ずるに、下伝に「財を理め辞を正す」と。劉熊に「辭」に作る。景君碑陰「乃ち遺辭を著す」と。鄭固碑「其の辭に曰く」の「辭」は並びに「辭」に作る。孔龢碑に「繫辭」に作るは徴するに足る。古人の「辭辭」は別く無し。劉氏『世説新語』に云く「蔡邕曹娥碑を題す。黄絹幼婦外孫齏臼解して曰く、齏臼は辛を受くる所以。辝は字なり」と。此れも亦た「辭」は「辝」に作るの証。

［口語訳］

意味を押し広げて述べ、占辞を繫ける。（孔廟置百石卒史碑）　爻を計り知り、占辞を繫ける。（博陵太守孔霊碑）

繫辞上伝に「辞があって吉凶が明らかになる」とある。また「占辞を繫けて、変化する人間活動の吉凶を断定せられた」とある。これゆえにこれを「爻」というのである。「繫」を引用してあるものは「毄辞」に作り、あるものは「辝」に作り、「爻」は「肴」に作るものである。『隷釈』に「「毄」はつまり「繫」の文字である」という。北海相景君銘に「あるものは繫（毄）いで管弦を褒める」とある。『隷弁』に「考えるに、『説文解字』に「繫」は糸に従い毄に従う、とある。碑は糸を省いている。『漢書』景帝紀「耕す土地がなく、牧畜を繫（毄）ぐ」とある。その顔師古注には「「毄」は古は「繫」の文字である」とある。景北海碑陰に「つまり残された辞（辝）が明らかになる」とある。『隷弁』に「考えるに、『説文解字』に辝は受けないことである。辛に従い受に従う。辞説の辞と同じではない。碑は思うに通用しているのであろう」とある。『隷釈』に「「肴」を「爻」とする」とある。『隷弁』に「考えるに、「肴」と「爻」とは同じ。蘇東坡の『易伝』に、「爻」は折俎である。古は折俎を「爻」としていた。その文は折俎の形を象る。後世『易経』に六爻あるので、肉を加え「肴」としそれで区別した」とある。朱百度が考えるに、繫辞の『経典釈文』に「「繫」の文字は「毄」に従う。もし直ちに「毄」の下に糸を作るものがあれば、音は口奚の反である。これは誤りである」とある。これによれば、陸氏が見る元の文字は正に「毄」に作る。考えるに、「毄」は撃のように読む。『説文解字』に「毄」に作っていう、互いに撃中する。音は中麻の切である、と。『周礼』攷工記の廬人「戈戟の兵器（毄兵）の柄は、本・末・中央部とも同じ強度を持つ」、弓人「弓を用いる時は、先ず弓体の強弱を調試（毄摩）する」の鄭玄注にいう「「毄」はは、らうことである」と。これはすべて「毄」の文字の本義を用いている。他はすべて「毄」を借りて「繫」とする。『周礼』司門に「祭祀用の牛のいけにえは繫ぐ」とある。校人に「三十六頭を一繫とする。繫ごとに馭夫一人を置く」とある。二百十六頭（六繫）を一廐とし、廐ごとに僕一人を置く」とある。『経典釈文』に「ともに「毄」に作って、「毄」は元とまた「繫」に作る」とある。『集韻』に「「毄」と「繫」とは同じ」という。これは正しい。孔彪碑にまさしく「毄」に作る。『経典釈文』と合致するのは証拠とすることができる。陸説は本があるとする。また考えるに、繫辞下伝に「必要物資を増産し、言葉（辞）を正しくすることを民に伝える」とある。劉熊碑には「辭」に作る。景君碑陰に「遺辭を明らかにする」とある。鄭固碑に「其の辭に曰く」とある「辭」はともに「辭」に作る。孔龢碑に「繫辭」に作るのは証拠とすることができる。古人の「辭辭」は分けることがない。劉義慶の『世説新語』に「蔡邕は曹娥碑を書いた。碑には黄絹・幼婦・外孫・齏臼の八字が記されていた。それを解いて、齏臼は辛を受け入れるものである。文字にすると辝である」とある。これもまた、「辭」は「辝」に作るものの証拠とすることができる。

［注］

1孔廟置百石卒史碑…後漢の桓帝の永興元年（一五三）の刻。漢魯乙瑛が孔子廟に百石卒史を置き、祭祀を掌らしめたことを記したもの。隷書十八行、一行四十字。山東省曲阜の孔子廟に現存する。乙瑛碑ともいう。

2隷釈云毀即繫字…巻八博陵太守孔霞碑の項に見られる。

3北海相景君銘…後漢の桓帝の本初元年（一四六）の刻。隷書十七行、一行三十三字。碑は上鋭下方で、穿がある。景君の没後、門人故吏がその徳を慕って建てたもので、山東省済寧文廟内に現存する。

4音口奚反…『経典釈文』巻二には「口奚の切」とある。

5孔彪碑…後漢の霊帝の建寧四年（一七一）の刻。一行四十五字。碑陰に故吏十三人の名がある。碑は円首で、左右対称の暈を作り、穿がある。孔彪は孔子十九世の孫の孔宙と兄弟で、山東省済寧曲阜文廟内に現存する。

6劉熊作辭…『隷釈』巻五の酸棗令劉熊碑に「理財を正に辭し、束帛戔戔たり」とある。

7景君碑…『隷釈』巻六にある「謁者景君墓表」のこと。

8劉氏世～辭字也…『世説新語』捷悟篇の引用。しかし、ここの引用は不正確である。捷悟篇には「魏武嘗て曹娥碑の下を過ぐ。楊脩従う。碑背上に題して黄絹・幼婦・外孫・虀臼の八字を作るを見る。魏武、脩に謂いて曰く、解するや不や、と。答えて曰く、解せり、と。魏武曰く、卿未だ言う可からず、我の之を思うを待て、と。行くこと三十里、魏武乃ち曰く、吾れ已に得たり、と。脩をして別に知る所を記さしむ。脩曰く、黄絹は色絲なり、字に於いて絶と為す。幼婦は少女なり、字に於いて妙と為す。外孫は女子なり、字に於て好と為す。虀臼は辛を受くるなり、字に於いて辭と為す。所謂絶妙好辭なり、と。魏武も亦た之を記すこと、脩と同じ。乃ち歎じて曰く、我が才卿に及ばざること、乃ち三十里なるを覚ゆ、と」とある。

97　**［本　文］**

居則玩其辭、動則察其変。（元文先生李子材碑）[1]

繫辭、是故君子居則観其象、而玩其辭、動則観其変而玩其占。

［訓　読］

居すれば則ち其の辭を玩び、動けば則ち其の変を察す。（元文先生李子材碑）

繫辭伝に「是れ故の君子は居れば則ち其の象を観、其の辭を玩び、動けば則ち其の変を観て其の占を玩ぶ」と。

［口語訳］

平居無事の時には、その卦に繫けられている爻辭を熟読玩味し、動いて事を行うに当たっては、陰陽の変化を観察する。（元文先生李子材碑）

繫辭上伝に「君子は平居無事の時には、易の卦象を観察してその卦に繫けられている爻辭を熟読玩味し、動いて事を行うに当たっては、陰陽の変化を観察して占辭を熟読玩味する」とある。

［注］

1元文先～子材碑…不明。

平成十一年九月十七日受理

ひがし・けんじ

A Translation and Annotation of "Hàn bēi yǐn jīng kǎo"
（漢碑引経攷）（Part 5）

Kenji HIGASHI